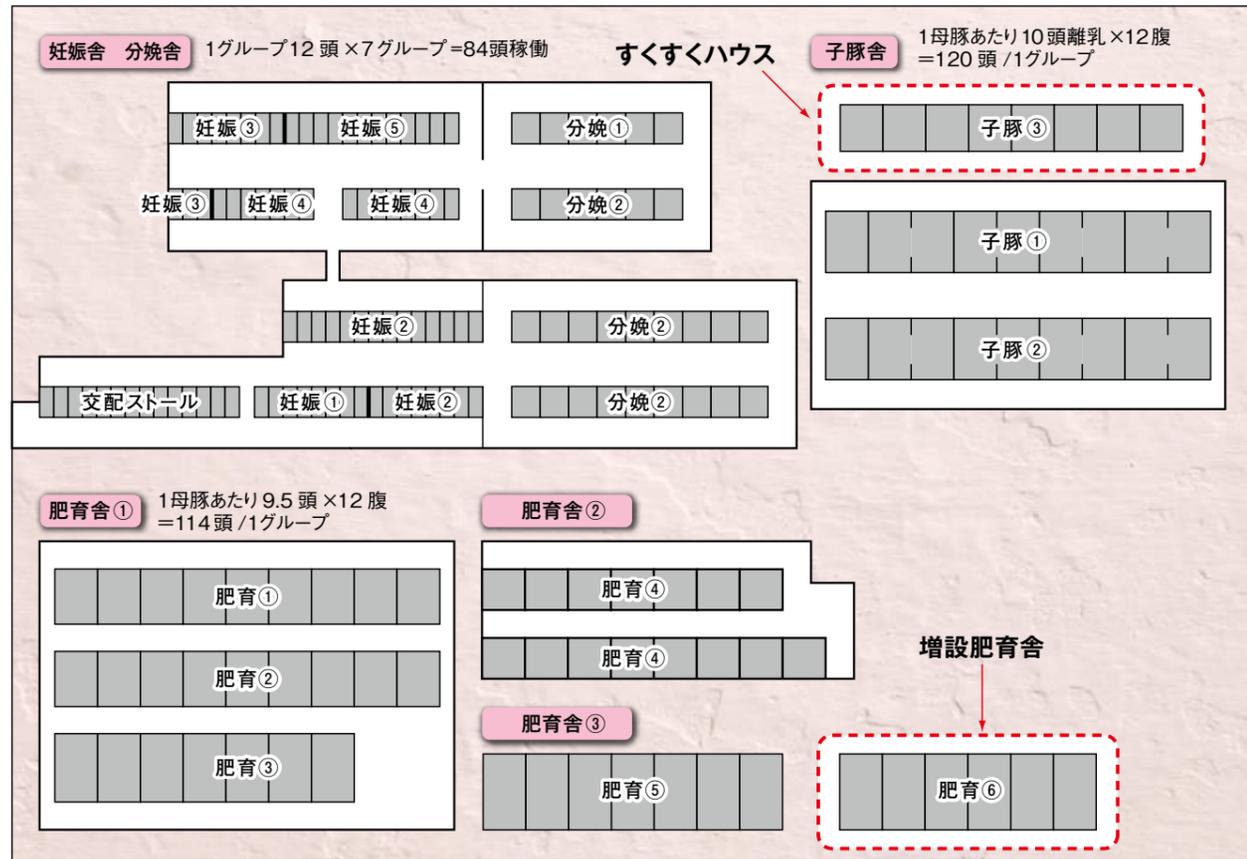


図1. 農場レイアウト



効果

オールイン・オールアウトを実施した年（14年9月～12月）と、連続飼育であった前年同時期（13年9月～12月）の肥育成績を比較してみたところ、同じ平均出荷日齢で枝肉重量が0.9kg増加しており、背脂肪厚も0.38cm（13年1.78cm、14年2.16cm）厚くなりました（図2）。

離乳子豚舎から肥育舎までの全ての发育ステージにおけるオールイン・オールアウトを実施したところ、豚舎の衛生環境が改善されました。その結果、发育成績が向上し、十分な脂肪をつけた健康な豚肉の生産が可能となりました。

成することにより、通路なども含めた豚舎全体の洗浄が行いやすくなりました（写真1）。

また、発酵床豚舎では、オールアウト時に約3分の1の敷料を除去し、同量のみみ殻と戻し堆肥を投入・混合します。殺菌等のため、敷料の温度が十分に上がっていることを確認し受入を行います（写真2）。

しかし14年に肥育舎を二棟増築したことで、離乳子豚舎と肥育舎を含めた全ステージでのオールイン・オールアウトを達成することができました（図1）。

肥育舎は平床豚舎と発酵床豚舎の2種類を保有しています。平床豚舎は受入1週間前までにオールアウトし、洗浄・消毒・乾燥を行った後、オールインを実施しています。豚舎ごとのオールアウトを達

取材した養豚農場（母豚規模約100頭の二貫経営）では、2009年よりワイークリー生産方式からスリーセブン生産方式への転換を行い、約1年の期間を経てオールイン・オールアウト体制の構築を図りました。

転換開始直後は、既存の簡易離乳子豚舎「すくすくハウス」（全農畜産サービス株式会社）を活用し、グループごとの収容が可能であった離乳子豚舎のみのオールイン・オールアウト体制を構築しました。しかし、肥育舎は収容面積の不足によりオールイン・オールアウト体制が構築できずに連続飼育となっていました。また、この肥育舎の不足により、離乳子豚舎から肥育舎への移動が遅れて、度々子豚舎の洗浄期間が取れない状況でした。

図2. オールイン・オールアウト実施による効果

